

中部ブロック会報 第34号

2019年度中部ブロック研究会【1日目】2020年1月11日(土)【2日目】2020年1月12日(日)

開催地:金沢星稜大学 〒920-8620 石川県金沢市御所町丑10番地1

【2019年度・中部ブロック研究会を終えて】 ブロックリーダー 中川 雅人(中部学院大学)



この度、2020年度までのリーダーを拝命しました中川雅人と申します。こうして皆様に研究会の報告をお届けできますことを大変嬉しく思います。準備にご尽力いただいた委員の皆様、発表・聴講等でご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。さて、今年度は新たな取り組みとして実践報告を行いました。これは、教職員の指導・助言の下、学生が行なった活動について個人またはグループで報告するものです。今後も皆様のご意見をお聞きしながら、微力ながら研究会の活性化と発展に努めて参る所存ですので、どうぞ宜しくお願いいたします。

【次期運営委員挨拶】



次期サブリーダー 岡野 大輔(金城大学)

この度、運営委員を拝命しました金城大学の岡野大輔と申します。本学会へは2013年に入会をお認め頂き、研究発表や助成研究など貴重な機会を頂いて参りました。また、2016年には本学で開催されました全国大会において実行委員を務めさせて頂きました。本年度からは、運営委員として、また、サブリーダーとして微力ながら尽力して参る所存でございますので、引き続きご指導賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



次期運営委員 坂田 裕介(藤田医科大学)

この度、中部ブロック運営委員を拝命致しました、藤田医科大学の坂田裕介と申します。宜しくお願い致します。本学会の趣旨のもと、中川雅人ブロックリーダーをはじめ、サブリーダー、運営委員の先生方と協力し、微力ながら中部ブロックの発展に寄与できるよう努めてまいる所存です。何卒、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い致します。



次期運営委員 奥村 実樹(金沢星稜大学)

今年度の中部ブロック研究会を、私の所属いたします金沢星稜大学にて実施できましたこと、大変うれしく存じます。研究会の教室など設備の準備、基調講演、情報交換会ならびに懇親会の企画・準備などさせていただきましたが、皆様にご満足いただけましたら幸いです。また、大学までのバスなど公共交通機関の便に関しまして、特に県外からの参加者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことご容赦ください。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



次期運営委員 山本 恭子(名古屋学芸大学)

このたび、中部ブロック運営委員を拝命いたしました名古屋学芸大学の山本恭子と申します。初めて運営スタッフとして関わらせていただくことになり、行き届いた仕事ができるのか不安に感じることもありますが、ブロックリーダー、サブリーダー、運営委員の先生方とともに、会員の諸先生方のお力添えをいただきながら、本研究会の発展にお役に立てるよう努めて参る所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

基調講演【ローカルで育つ若者たち～インターンシップの質保証とコーディネーターの役割～】

森山 奈美 氏(株式会社御祓川 代表取締役社長)

報告者: 奥村 実樹(金沢星稜大学)

株式会社御祓川は、石川県の七尾市に位置し、主に能登の企業など団体に対し、インターンシップ・プログラムの提供と参加希望者を募るいわゆるマッチングを手掛けている。同社ではそのようなインターンシップを『能登留学』と呼んでいる。同社のインターンシップは、4か月以上の「長期」のものと、2か月以内の「短期」のものを準備し、どちらも文部科学省などが想定するインターンシップよりも長い。また、参加者は、インターン先において、より大きな役割(プロジェクト担当者など)を期待されている。

石川県の中でも、人口密度が低く過疎化地域も存在する能登地域を、同社はインターンシップの舞台に選んでいる。インターン生の学生は、県外出身者が多く、これをきっかけに能登の企業へU/Iターン就職した数は8人と成果をあげている。これらの成果につながったのは、受け入れ先ならびに関連する地域住民の本気度であり、それが学生のやる気を促すために重要なのである。

研究発表①【継(つなぐ)ゼミ活動から育成された社会人基礎力】

○菅瀬 君子(愛知学泉短期大学)



菅瀬 君子 先生

目的: 菅瀬ゼミでは先輩から引き継いだ地域貢献活動を通し、PBLによる社会人基礎力の育成を中心に、自己の潜在能力を開発しながら地域・社会に貢献できる社会人へと成長できるよう取り組んでいる。ゼミの活動を通してどのような社会人基礎力を身につけることができたかを報告する。

方法: ゼミ生(2年生)数は11名。活動はゼミで学んでいるパソコンスキルを活かした「お祭り記念缶バッジデザイン・制作」を主とした。学生に対し活動の取り組みに対する社会人基礎力12の能力要素の自己評価(5段階評価)を実施した(4月・10月)。

結果: 4月時点での社会人基礎力自己評価は、12の能力要素中10要素が2レベル(あまりできなかった)～3レベル(なんとかできた)であったが、10月時点ではすべての要素が4レベル(よくできた)へとアップし、特に「実行力」が高く一人ひとりが意識し取り組んだことが分かった。みなで協力し達成感を共有しやればできることが活動を通し実感でき、自信へとつながった。

研究発表②【学生プロジェクトによる地域企業を題材とした資料作成とその公表事例】

○奥村 実樹(金沢星稜大学)



奥村 実樹 先生

PBL型活動の中でも、地域と関わる形の活動は、地域活性化など地域への貢献要素と、アクティブ・ラーニングを含むその教育効果によって、高等教育機関を中心に全国的に実践されている。また、そのプロジェクトの方向性が経営活動に類似することから経営・ビジネス教育の観点からも有用性が見込まれている。

地域に関わるPBL型活動は、そのほとんどが「商店街の集客活動」「廃校など過疎地域施設活用」「観光集客方法」などをテーマとしつつも、その実際の解決行動ではなく「アイデアの発表」を一時的・イベント的に実施する形態である。もちろん 時期的には“単年度”で完結するものである。

本発表で研究事例として取りあげたのは、その活動の成果を継続的に年度をまたぎ追加修正しつつ、外部に公表していく教材・資料である。そのような活動の実践形態にはどのようなものがあるのかを明らかにし、また、どのような成果や課題が考えられるかなどについて考察した。

研究発表③ 【PBLの抱える課題について

ー地域との連携によるPBLの実践を踏まえてー】

○中川 雅人(中部学院大学)



中川 雅人 先生

近年、アクティブ・ラーニングへの関心が高まっている。アクティブ・ラーニングにはPBLを用いない手法があるにも関わらず、アクティブ・ラーニング=PBLといった誤解と、アクティブ・ラーニングへの関心（あるいは必要性）の高まりにより、PBLを用いた授業が広がりを見せている。

筆者もPBLを取り入れた授業を実践してきたが、この過程において、PBLには教室内では得ることができない貴重な学びがある一方で、①学内外での学生の活動やグループ内での貢献度の把握が困難であり公平な成績評価が難しいこと、②グループ活動では熱心な学生の負担が大きくなること、③基礎的な学びをしないまま実践的な活動に取り組む場合が多いこと、④プロジェクトを継承する活動では、学生の能力差によって成果物の品質が安定しないこと、⑤成果物の完成度がプロジェクトの継続性に影響を与えることといった課題があることもわかった。

研究発表④ 【ビジネス実務を考える

～『よくわかる社会人の基礎知識』刊行にあたって～】

○岡野 大輔(金城大学)・手嶋 慎介(愛知東邦大学)・河合 晋(岐阜協立大学)



岡野 大輔 先生

本研究は、2019年3月に株式会社ぎょうせいより刊行された『よくわかる社会人の基礎知識～マナー・文書・仕事のキホン～』の執筆陣に加わった者のうち、法学や会計学、経営学など、ビジネス実務以外の固有の領域を有する分野を専門とする者が、本書の執筆を通じて、ビジネス実務と各専門領域の関係について考察を行ったものである。「ビジネス実務と法学」については、ビジネス実務の体系における法学の位置づけを明らかにし、実践的な教育内容や教育手法の開発が求められていること、「ビジネス実務と会計学」については、会計は「教養」であり、簿記は「原理または基礎」であること、「ビジネス実務と経営学」については、ビジネス実務は経営学教育を補完あるいは牽引する可能性を含むものであることが示唆された。本書を利用したビジネス実務教育を通じて、ビジネス実務とは何か、ビジネス実務を支える専門知識との関連を考える際の一助となることが期待される。

研究発表⑤ 【人口減少に向けた産業の担い手育成

～高山市でのアンケート調査に基づいて～】

○河合 晋(岐阜協立大学)・竹内 治彦(岐阜協立大学)・見館 好隆(九州市立大学)



河合 晋 先生

一般財団法人飛騨高山大学連携センター委託調査研究「担い手育成における仕組み作り調査研究」において、平成30年度実施分の報告をした。

①高校3年生781名に対するアンケート調査

Uターン群と非Uターン群は、郷土への愛着度に0.95の有意差がみられ、郷土への愛着度は大学進学者のUターンに繋がる重要な要素であり、キャリア形成をどう関連させるかが課題となる。一方、企業理解度は0.30の有意差しかみられず、大学進学者の地元企業認知度がUターンに関係があるとは言えない。自らのキャリア形成と進学先をどう関連させられるかが課題となろう。

②インターンシップ8団体に対するインタビュー調査結果、インターンシップコーディネートモデルを提示し、Uターンに繋げる4つのアクションプランを提示した。

③高山にUターンした社会人10名に対する座談会調査結果

高山へのUターンを促すプランとして、高山には就職先があることの周知、高山で暮らすメリットや支援の周知、高山に戻ることの意義の周知の3点が抽出された。

研究発表⑥【看護師が小規模離島で勤務するモチベーションに関する研究】

○福山 祐介(藤田医科大学)

本研究では、日本全国の小規模離島(特に人口1,000人未満の小規模離島)の看護師を対象に、離島で看護師が勤務するモチベーションについて調査し、考察した。この調査から、離島勤務の看護師募集に対して、限られた経営資源の選択と集中が可能となり、看護師の充足により、離島医療提供体制の安定化につながる。本報告は、2019年に実施したアンケート調査に基づき、結果及び考察を報告した。

現在離島で勤務を続けている看護師の主なモチベーションとして、「人とのつながり」、「貢献」などがあげられる。また、離島勤務の不満は、「新しい医療技術にふれる機会の少なさ」、「研修に参加しにくい」が上位にあり、給与などの外発的動機ではなく、自分を成長させる業務につながる内発的動機が重要であった。また、離島における看護師の確保と定着において、新卒者と離島勤務の接点が限られていることが一つの阻害要因であることについても報告を行った。



福山 祐介 先生

研究発表⑦【働き方改革による看護管理職の過重労働の検証】

○坂田 裕介(藤田医科大学)・村田 幸則(藤田医科大学)・服部しのぶ(藤田医科大学)・米本 倉基(藤田医科大学)

本研究は、働き方改革による管理職の過重労働について、その問題が顕著化している看護管理職に焦点を当て、その実態を明らかにすることを目的とした。方法は、全国の病院に勤務している部下を有する看護管理職を対象にWebアンケート調査を行い、質問は、先行文献から働き方改革による管理職の過重労働として発生する仕事内容、勤務時間、仕事意識に関する17項目とし、働き方改革の取り組みが始まる前と現在の変化について300人から回答を得た。その結果、勤務時間、仕事内容、仕事意識のすべての項目が増加しており、管理職の過重労働の発生が看護職においても確認された。また、管理職の過重労働の発生には、部下の肩代わりの仕事と部下の管理の仕事が影響しており、管理職は限られた勤務時間のなかで、働き方に多様な価値観をもつ部下の異なる能力を組み合わせながら、業務分担の見直しや業務改善によって、生産性向上に取り組む意識の高まりが示唆された。



坂田 裕介 先生

研究発表⑧【進化するティール組織に適応した人材育成の考察と取組み -新しい働き方ができる組織の大学教育-】

○米本 倉基(藤田医科大学)・服部しのぶ(藤田医科大学)・村田 幸則(藤田医科大学)・坂田 裕介(藤田医科大学)

近未来の経営組織で自律的な共同体として進化したティール組織が注目されており、この組織形態の急速な進化に対して、大学におけるビジネス教育の在り方も進化しつづけないといけないが、必ずしも自律心涵養の教育をしているとは言えない。本研究は、ティール組織の特徴要件から、近い将来、求められる能力を抽出し、その能力獲得のための経験学習モデルを採用した教育の取組みを報告するものである。方法は、ティールで求められる能力を、F. ラーナーによる組織構造、人事関連、日常生活、主な組織プロセスの4つの概念の下にあるティールの34項目を中心とした特徴から抽出した。抽出された能力の効果的な教育方法を省察的な経験学習モデルと仮定して、そのモデルに基づく授業を試験的に実施した結果、自律的でフラットな組織に対応した自己省察ができる人材教育に対して、経験学習モデルを応用した本取組みは、一定の効果が期待できることが示唆された。



米本 倉基 先生

実践報告①【地域との相互理解を目指した実践的取り組みの報告 -地域保育園における協働制作を通じたコミュニケーション活動-】

中村 千聖**・高垣 怜佳**・加藤 亮太**・吉村 美路(愛知東邦大学)



中村 千聖さん
高垣 怜佳さん
加藤 亮太さん

今回の発表では、愛知東邦大学の学生が地域保育施設で行った、地域連携を目的とした取り組みを報告した。大学と施設は近隣でありながら、学生・保育施設職員および園児の交流はなく、学生の認識は時折大学構内を散歩する園児の集団を見かける程度であった。

以上の課題から本取り組みでは、学生と園児によるハンドツリーの制作を実施、活動の前後で発生したコミュニケーションを含む活動効果を分析した。

学生・園児・保育園スタッフ・保護者を対象に行った事後アンケートの結果から、活動における満足度指数は、当日の活動だけでなく事前事後にどのように関係構築に心を配るか等、前後コミュニケーションも大きく影響することが明らかとなった。保護者には、活動後にメッセージ付きのお子様の手形をプレゼントする等、間接的なコミュニケーションを実施した。これら事前事後のやりとりは、活動における協力と良好な関係構築に繋がっていることが明らかとなった。

実践報告②【大学の教育プログラムと連動したスタートアップビジネスの事例報告 ～TOHO Learning House の仕組みと実績～】

島袋 泰志*・阿比留 大吉・河合 厚志・手嶋 慎介(愛知東邦大学)

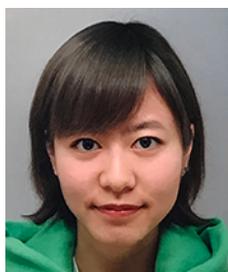


島袋 泰志さん

本報告は、本学における教育寮TOHO Learning House (以下TLH) に関するビジネス及び教育プログラムのスタートアップビジネスの実践報告である。ゲストハウス事業はファシリテーション企業、寮生、大学担当者の3者間のリレーションにより、現在に至るまでの4ヶ年で増収となっている。仕組みとして特徴的な点は、大学における収入事業として位置付けられながらも、あくまで「実習施設」という位置づけ。他では得られないビジネスの実践の場として寮生を中心とする学生の貴重な体験を創出する機会を継続中である。また、大学側が予算をもち、ゲストハウスに必要な経費の一切を保証していることなど「銀行」のような役割を持ち、必要経費を投資しているのである。学生が自主運営するゲストハウスにおいて成長に大きく影響を与える教育プログラムとして、運営におけるトラブルや業務改善を中心に何もできなかったただの高校生が1つの店を運営できるようになるまでを事例報告した。

実践報告③【つながる・ひろがる読谷村プロジェクト1.0】

山本 玲子*・河合 厚志・手嶋 慎介(愛知東邦大学)



山本 玲子さん

PBL型授業を1年間受講して学生は何を学んでいるのか?という問題を、愛知東邦大学経営学部地域ビジネス学科の専門科目「専門プロジェクト」を事例として、一受講生の視点から考察した。沖縄県中頭郡にある日本一人口の多い「読谷村」をテーマにしたプロジェクトでは、実際にフィールドワークとして現地に住む方の生活体験、読谷村で働く人々の考え方や、コミュニケーション方法について学んだ。また、PBL型授業を受けるに当たって悩んだポイント、教員に対して学生が求めていることは何か、プロジェクトに対してモチベーションの高い学生とそうでない学生にはどのような指導、サポートをするべきなのか考えた。教員は、学生個人個人と向き合い道すじを教えるのではなく、共に考え道を見つけること、また、受講生に均等な成果を求めるのではなく、学生個人にあったゴールを設定し、そのサポートをすることが、PBLとして成果を得やすいということを学生視点から考察し報告した。



記録的な暖冬の年、雪ではなく小雨の降るなか、石川星稜大学を後にしました。懇親会の会場は、金沢駅のシンボル「鼓門」からほど近く、和モダンな作りの素敵な居酒屋で、北陸の旬の素材を使った美味しい創作料理とお酒を味わいました。

懇親会の参加者は15人でした。奥村実樹先生の乾杯のご発声により会が始まり、和やかな雰囲気の中、会員相互の交流をさらに深めることができました。

お知らせ①【全国大会 ぜひご参加ください】
大会統一テーマ『新時代を展望するビジネス実務』

<大会日程及び会場>2020年6月13日(土)・14日(日) 北海商科大学

1日目には、講演「北海道コンサドーレ札幌の地域に根差したスポーツビジネス」(株式会社コンサドーレ 斗澤元希氏)、2日目には、「研究技法ワークショップ」など、盛りだくさんの内容です。

お知らせ②【中部ブロック研究助成について】

今年度の研究助成につきましては、現在、運営委員会で検討中です。決定次第、メールでご案内いたしますので、今暫くお待ちください。

ご意見、ご要望等ございましたら、①会員番号、②会員種別(正会員、学生会員等)、③所属、④氏名を明記の上、下記の問い合わせ先までご連絡ください。

※お問い合わせメール naka@chubu-gu.ac.jp (中部学院大学 中川)

【編集後記】

ブロックサブリーダー 岡野 大輔 (金城大学)

ビジネスをとりまく環境が大きく変わりつつある中、本学会の果たすべき役割は益々大きくなっています。2020年6月開催の全国大会では、「新時代を展望するビジネス実務」を統一テーマに、急激な変化の中で、これからのビジネス実務のあり方について幅広い議論が行われます。本年度の中部ブロック研究会においても、今後のビジネス実務に関する多角的な研究発表が行われ、活発な議論が展開されました。今回、会場校となりました金沢星稜大学の関係者の皆様方をはじめ、研究会の開催及び会報へのご執筆にご尽力・ご協力頂きました先生方・参加者の皆様には心より御礼を申し上げますとともに、引き続きご支援・ご協力賜りますよう宜しくお願い申し上げます。